



<<<<< 目 次 >>>>>

第23回日本がん検診・診断学会総会の報告	1
第24回日本がん検診・診断学会総会の開催にあたって	2
書評：日本は世界一の「医療被曝」大国	3

各学会からの TOPICS

第23回日本がん検診・診断学会総会の報告

齋藤 豪 (札幌医科大学産婦人科学講座)

このたび第23回日本がん検診・診断学会学術集会を平成27年8月21日(金曜日)、22日(土曜日)に札幌市・ホテルさっぽろ芸文館で開催いたしました。

真夏の札幌

今回の第23回日本がん検診・診断学会は婦人科が担当ということで、第24回日本婦人科がん検診学会との共同開催となり、小生が主催している札幌医科大学産婦人科学講座が担当いたしました。開催に当たり気になるのはやはり学会参加者数で、北海道開催のメリットを生かすため「8月末というと本州ではまだ暑い盛りですが、北海道では秋の気配が感じられ過ごしやすくなってまいります。会員の皆様には、学会に参加していただき暑さで夏バテになった体を涼しい札幌でリフレッシュしていただきたいと思っております」という触れ込みで集客作戦を立てました。実



図1 学会ポスター。北海道らしく時計台と寝転ぶウシを入れてみました



図2 学会長挨拶



図3 懇親会にて。野田起一郎・近畿大学名誉学長と渡辺決・京都府立医科大学・名誉教授、片淵秀隆・日本婦人かがん検診学会副理事長



図4 平成28年度の第24回日本がん検診・診断学会は日本大学医学部消化器・肝臓内科の森山光彦教授

際、今年の札幌は天気もよく、湿度も低く非常に爽やかな夏を迎えることができました。これで多くの参加者が見込まれると、ほくそ笑んでいたのですが、神様は新たな試練を与えてくれました。それはホテル問題でした。ある会員から「演題を登録したのですがホテルが確保できず演題を取り下げたい」というメールをいただきました。「まさか」と思いホテル予約サイトを覗くと札幌市のホテルが2か月前にもかかわらずすべて満室なのです。参加者300～400人の学会なので特に旅行会社を通じてホテルも押さえておりませんでした。それからはせめて役員の方だけでもと各ホテルに頼み込み、最低限の部屋を確保できました。このホテル不足の原因は、中国をはじめとしたアジア諸国からの観光客の急増でホテルのベッドが追いついていないことの様です。あるホテルの担当者は「バブル期並み」と話しておりました。

本題の学会概要

プログラムは例年通り特別講演、教育講演、シンポジウムが中心です。本学会は第24回日本婦人科がん検診学会との共催になりましたが、「がん検診率の向上のために」をテーマに広い視野から、がん検診のあり方を掘り下げてみようかと考えることを目標にいたしました。また、これからのがん検診を占うべく新しいがん検診の技術についてもご紹介いたしました。菊池浩吉・札幌医科大学前学長の「がん免疫とがん検診・診断・治療」の特別講演から始まり、マイクロRNAを用いた新しいがん検診への展望など将来のがん検診像の展望まで、数多くの活発なディスカッションがなされ、学会は非常に盛り上がりました。

次期開催

平成28年度の第24回日本がん検診・診断学会は日本大学医学部消化器・肝臓内科の森山光彦教授が主催して、平成27年9月16・17日に日本大学において開催される予定です。諸外国と比べると極端に低いとされる本邦のがん検診率を引き上げ、がん死亡率を少しでも低くするよう、今後のがん検診の発展が望まれます。

第24回日本がん検診・診断学会総会の開催にあたって

会長 森山光彦（日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野 教授）

このたび第24回日本がん検診・診断学会総会の会長を拝命致しました。この歴史ある日本がん検診・診断学会の会長を務めさせていただくことを大変光栄に感じております。平成28年9月16日（金）、17日（土）の2日間、日本大学会館（東京都千代田区九段）において開催いたします。第11回がん検診認定医講習会及び試験は9月17日（土）を

予定しております。

今日分子生物学的な新しい手法が開発され、これらががん検診に用いるべくさまざまな活動がなされており、がん検診への新知見が報告されつつあります。

これらを踏まえて本総会では、新しいモダリティを用いた今後のがん検診とそのあり方（精度管理）を中心にプログラムを設定し、特別講演、教育セミナー、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップに加え、今後活用されるべく新しい検査法についてのディスカッションの場を予定しております。これらの主題を通して、基礎研究よりがん検診への積極的な活用を促進できれば幸いです。また、一般演題は口演にて行う予定でございます。

この先の新世代へ向けてのがん検診の道のりを歩み出すべく、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

第24回
日本がん検診・診断学会総会
「がん検診・診断学会の現状と今後」

会長 森山 光彦
日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野教授

会期 平成28年9月16日(金)・17日(土)

会場 日本大学会館
東京都千代田区九段南4-8-24
TEL 03-5275-8001

第24回日本がん検診・診断学会総会 事務局
事務局長 松村 寛
日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野内
〒173-8610 東京都板橋区大谷口上町30-1
TEL 03-3972-8111 (内線2424)
Fax 03-3956-8496

会長 森山 光彦

(日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野 教授)

会期 平成28年9月16日(金)・17日(土)

会場 日本大学会館

東京都千代田区九段南4-8-24

Tel. 03-5275-8001

第24回日本がん検診・診断学会事務局

小川 眞広、松村 寛

日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野内

〒173-8610 東京都板橋区大谷口上町30-1

Tel. 03-3972-8111 (内線2424)

Fax. 03-3956-8496

書評：日本は世界一の「医療被曝」大国

近藤 誠著 集英社新書 2015年6月 200頁 720円+税

飯沼 武(放射線医学総合研究所名誉研究員(医学物理士))

はじめに

近藤 誠氏がまた、上記の本を著し、大きな波紋を投げかけている。近藤氏をご承知のように日本の医療界に大きな影響を与えていることは間違いない。しかし、その主張には一部、科学的に正しいところがあるが、多くは極端な結論を出し、読者である一般の人に間違えた情報を与えている。今回の本でも、科学的に正しい部分と間違っている部分が混在しているように思う。以下に筆者の印象を述べるので、是非、会員諸兄も本書を読み、ご意見をいただきたい。

本書の概要

本書は以下の章からなる。はじめに。第一章：世界一の医療被曝大国、日本。第二章：低線量被曝の危険性。第

日本は世界一の
「医療被曝」大国

近藤 誠
Kondo Makoto

放射線検査による
発がんリスクは
世界一!

たった1回のCT検査でも
発がん率は上がる!

※1 放射線科 Lincos 2004;202 345
※2 放射線科 British Medical Journal 2013;346 f9360
集英社新書 07881

三章：大人より深刻な子供の被曝。第四章：放射線検査の種類。第五章：自分の被曝線量を知るには。第六章：無用な被曝を避けるために。第七章：日本で医療被曝が横行する理由。第八章：医療被曝の今後。おわりに。資料：小児CTガイドライン－被曝低減のための各章である。

各章の概要を解説する。まず、「はじめに」では医療被曝が多い理由として、日本人が放射線検査を平気で受けること、医療における被曝線量に制限のないこと、低線量でも発がんのリスクがあることを述べている。第一章では日本の放射線検査が非常に多いことから被曝線量が世界の中でも圧倒的に多いことを述べ、2004年の英国の「ランセット」に載った論文を引用している。そして被曝による発がんのメカニズムとしてのDNA損傷に触れ、LNT仮説を支持している。第二章では近藤氏本人が放射線治療医であることから、自身が経験した患者が放射線誘発がんになったことを紹介し、続いて日本における人口100万人あたりのCT設置台数が世界で最も多いことを述べ、医師たちがとりあえずCT検査をオーダーするため医療被曝が多くなると指摘している。第三章は小児のCT被曝の問題を取り上げ、とくに日本において被曝線量がとても多いと主張する。第四章では一般の人向けに、放射線検査がどのようなものであるかを解説している。

続いて、第五章では受診者自身が自分の被曝線量を知るためにはどのようにしたらよいかを述べる。日本では「医療被ばく手帳」や「レントゲン手帳」などに自分の被曝記録を病院名などとともに記録しておくことをすすめている。そして、CTの被曝量であるCTDIとDLPについて解説する。第六章では本書の狙いともいうべき、学校の集団検診と社会人の定期健康診断を取り上げ、それが減らされてきた経緯を説明し、続いて、がん検診として結核検診から移行した胸部X線による肺がん検診やマンモグラフィ乳がん検診を取り上げ、その無効を主張している。第七章では日本で行われている胸部X線による結核検診と胃がん検診を批判しています。とくに、胃がん検診では近藤氏の主張する「がんもどき」を発見しているだけであると主張しています。最後の第八章では医療被曝を減らすためには、日本人に気軽に医療機関を訪ねないこと、CT検査を受けた場合には線量を問いただすことをすすめている。これらの発言は日本の医療に対する挑戦であるにとらえられる。

筆者の印象

近藤氏のこの著書を一読して、彼の主張に正しい内容があることを認めざるを得ない。

それは日本の医療被曝の多さである。確かに、日本は世界一の医療被曝大国であることは間違いのない。とくにCTによる被曝が世界一であることもその通りである。

しかし、私は医療被曝が多いこと自体が間違っているとは思わない。問題はそれが医学的に適応ではない検査に使われていることである。この点については、今後、放射線科医を中心に十分な検討が必要である、とくに、小児のCT検査に関しては近藤氏の言うとおり、日本の現状では多いと言わざるを得ない。また、医療被曝に関しては最も責任のある日本医学放射線学会の役割は大きく、日本では放射線の健康影響に関してほとんど教育を受けていない放射線科以外の医師に対する啓蒙活動も必要である。私は、今後、医学生に対して放射線の教育を義務化することが必要であると考えます。

ただ、LNT仮説そのものは、これからも検討が必要であり、その妥当性については今後の研究が待たれる。その結果によっては、低線量領域でのパラダイムシフトが起こる可能性を否定できない。

次に、近藤氏が指摘する日本のがん検診の問題についてコメントする。これは我々、がん検診をやっているものにとっては重大な課題である。まず、日本だけで行われているX線検査による胃がん検診が、今後、内視鏡検査に置き換わる可能性があるが、今後、胃癌死亡を示す観察的研究を行うことが期待される。つぎに、乳がん検診に関しては近藤氏の言うように、マンモグラフィ発見乳癌が全て「がんもどき」であり、救命効果がないという議論はRCTによって否定されているが、かなりの数の過剰診断(OD)があることは否定できない事実であり、救命数とOD数のバランスをどのように考えるかは大きな課題である。日本乳癌検診学会としては定量的にそれを示すことが期待される。

最後に、日本の肺がん検診の問題については、胸部X線による結核検診から明白なエビデンスなしに肺がん検診に変わったことは近藤氏の言う通りであり、その有効性には疑問がある。今後は低線量CT検診に置き換わるものが

期待される。近藤氏はCT検診も否定しているが、NLST論文は読んでいないようで、本の中に言及がない。NLSTのRCTが明白に肺癌死亡減少を証明したことについて、どのように思っているのかをお聞きしたい。私たち、日本CT検診学会の会員としては、日本のデータを示して低線量CT検診が肺癌死亡につながることを明らかにしてゆくことが必要である。

おわりに

以上、近藤 誠氏の著書に関する筆者の意見を述べました。彼の主張には耳を傾けなくてはならない点があり、医療界に対する警告となっていることは確かである。前回、ご紹介したアメリカの本、「過剰診断 健康診断が貴方を病気にする」と似た内容であり、とくに健康診断に従事する我々として正すべきところは多い。一方で、近藤氏の主張には間違った解釈に基づく結論もあり、それはきちんと正してゆかねばならない。近藤氏の社会的な影響は大きいので、この問題で日本医学放射線学会はきちんと反論すべきであると思う。

※この書評は本学会功労会員の飯沼武先生がCT検診学会のメールマガジンに投稿されたものです。CT検診学会理事長を兼ねる本学会金子理事長に許諾いただき、転載することとなりました。

編集後記

さわやかな季節となってまいりました。皆様にはますますご健勝の事と存じます。さてメールマガジン Vol. 3, No. 4を発行いたします。本号では、まず本年8月21日、22日に札幌ニトリホールにて開催されました「第23回日本がん検診診断学会学術集会」会長の齋藤 豪先生に恒例の学会報告を執筆いただきました。また「第24回日本がん検診診断学会学術集会」の会告を、会長を務めさせていただきます私、森山光彦が執筆させていただきました。紙面を借りまして、第24回の学術集会への多数の皆様方の演題応募およびご出席をお願い申し上げます。

功労会員の飯沼武先生より、本年8月17日に本メールマガジンに、「日本は世界一の「医療被曝」大国 近藤 誠著 集英社新書 2015年6月」の書評が投稿されました。検診を批判している書籍へのご意見であり、是非掲載して頂き学会員の皆様方のご意見を賜りたいとのことであります。皆様方の多数のご意見を賜りたいと思います。ご意見はメールマガジン編集担当の齋藤までお願いいたします。

寒さが増してくる季節です。会員の皆様におかれましても体調の管理にお気をつけ下さい。

広報渉外担当理事 森山光彦（日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野）

特定非営利活動法人日本がん検診・診断学会メールマガジン

2015年10月6日発行 Vol. 4 No. 3

〒102-0072 千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F (株)クバプロ内

特定非営利活動法人日本がん検診・診断学会

編集発行：株式会社クバプロ

TEL：03-3238-1689 FAX：03-3238-1837

E-mail：npojimu@jacdd.org URL：http://npo.jacdd.org/